



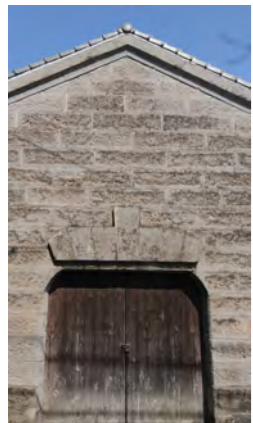
下飯屋と益山用水路



イヌマキと石垣、益山用水路



上飯屋 右の2階建てが長屋門



本町の石倉



イヌマキと石垣のある閑静な犬追馬場



国の登録有形文化財 旧鯉坂医院 (ポツリ)



旧南薩鉄道の機関車



加世田川の流れ



旧地頭飯屋横の石垣の小径



対岸の向江にも美しい生垣と石垣が続く

加世田麓周辺は、都市計画上、「第二種中高層住居専用地域（容積率 200% / 建蔽率 60%）」と幹線道路沿いが「第二種住居地域（容積率 200% / 建蔽率 60%）」、本町側が近隣商業地域（容積率 300% / 建蔽率 80%）」である。これまで上鴻巣や犬追馬場ではマンションが建てられていないが、中層マンション等のを建てられる都市計画上の区域となっている。

江戸時代から明治にかけての民家群、用水路、イヌマキの美しい景観を、後世に伝えるためには、今、何らかの方策が必要である。所有者の同意を得て、単体の建築を国の登録有形文化財にし使い続けるだけでなく、将来、景観重要建造物として周囲の景観の誘導をはかる方法や、地域を重要伝統的建造物群保存地区とし、景観と建築を保全するといった方法等がある。地域の住環境を保全することができるか、これらにはメリットとともに規制も生じる。登録有形文化財の場合は税制面の優遇、重要伝統的建造物群保存地区の場合、国や市町村の補助金により外観の保存修復ができ税制面でも優遇があり、道路や水路等の整備も国の補助事業として行うことも可能である。現在、何らかの文化財となっても昔のように「釘1本も打てない」という規制ではなく（文化財の種類より異なるが）、建物を使い続けるための補修や改修は認められている。どのようなすれば、住みやすく活気のある麓地区となるかを考える時期となっている。

注) 国土交通省住まいまちづくり担い手事業（2010年度）の補助で加世田の調査が開始され、鹿児島大学工学部建築学科木方研究室が悉皆調査、建築物実測調査を実施した。2015年度ガイドマップ修正協力は、鹿児島大学工学部建築学科鯉坂研究室

旧鯉坂正一郎邸 登録有形文化財

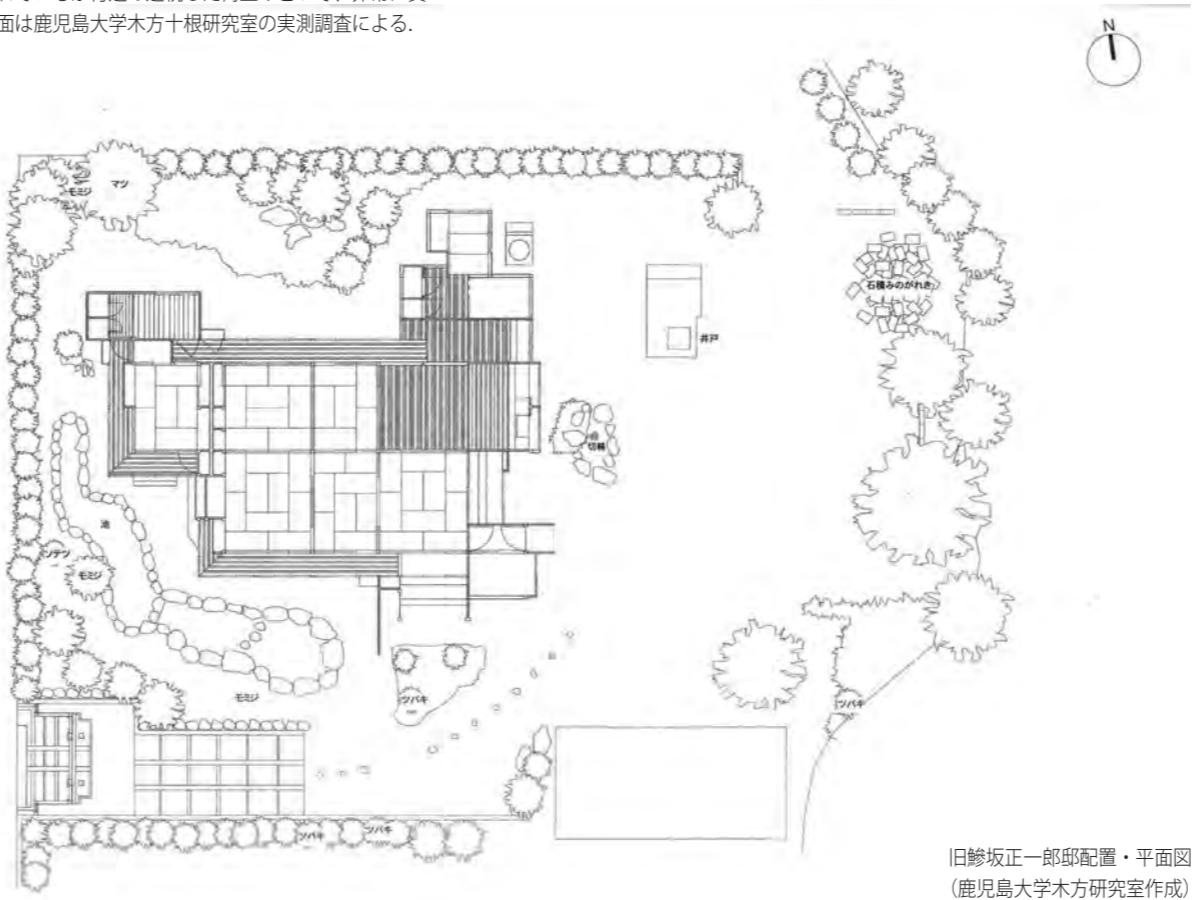
明治36年頃に旧川崎邸の敷地に鯉坂正一郎が建てた和風建築。鯉坂正一郎（明治3年生 大正5年3月28日47歳没）は、加世田小学校の校長だった。その後、実弟の鯉坂茂彦（明治10年1月10日生 昭和18年9月12日没）が家督を継いだ。茂彦は東京新橋で開業医をしていたが関東大震災で加世田に帰り、旧鯉坂医院（登録有形文化財 現ポツリ）を昭和初年に建て、加世田の町医者となった。

旧鯉坂邸の母屋は、上飯屋（現Sat邸）とほぼ同時期（明治中期）と言われ、似ている部分も見受けられが屋根の構造が異なっている。外側の梁が2本並列に配列された珍しい大架構である。江戸の武家屋敷に比べて規模が大きく、南側の10畳8畳10畳、北側の8畳6畳8畳を一体にして50畳の大広間となる。創建時は西側に土間の台所があったが、昭和後期に解体され現存しない。西側に丸柱でつくられた6畳の奥座敷と便所（陶器製の着彩）がある。母屋の中には、橋口五葉（1881-1921 大正10年没）のふすま絵（花木図・花鳥図・山水図）四点10枚があり、鹿児島市美術館に現在寄託されている。橋口五葉の手摺い描写力を物語る墨画着彩である。室内の赤壁は岡山の吹屋のベンガラでつくられたと言われ、欄間の細工も繊細な造りである。庭には池が巡らされ、昔は北側の裏庭まで池が続いていた。南東に2層の倉がある。この倉と武家門は、この母屋以前の可能性もある。道路と水路をはさみ、現在「ぽつり」となっている鯉坂医院の診察室と移築され現在「くるす屋」となっている洋風の入院病棟があった。診察室と母屋が現存しており、昭和初期の地方町医者の状況を知ることができる。道路に面してイヌマキと武家門があり、生垣のイヌマキが害虫のキオビエダシヤクのため荒れているが付近の連続した街並みとって、非常に貴重な景観のひとつである。図面は鹿児島大学木方十根研究室の実測調査による。



旧鯉坂正一郎邸南西外観

2010.9



旧鯉坂正一郎邸配置・平面図 (鹿児島大学木方研究室作成)



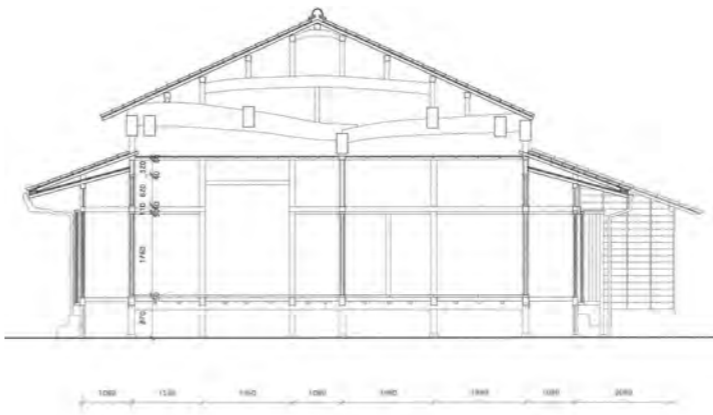
旧鯉坂正一郎邸庭園 1990年頃



旧鯉坂正一郎邸の屋根架構 (源川孝男作成)



旧鯉坂正一郎邸障子絵 (橋口五葉展図録 1995より)



旧鯉坂正一郎邸断面図 (鹿児島大学木方研究室作成)

加世田麓街歩きマップ

TOWNSCAPE OF KASEDA FUMOTO



加世田（かせだ）は、さつま半島の南西部にある街で、近世までは、薩摩藩の外城、近代になり南薩鉄道（現在廃線）や街道の拠点として栄えた。2005年に周辺の坊津等と合併し、南さつま市となった。加世田には100年以上前の郷士の民家が今でも残っている。しかしその麓に戦後まもなく国道がつくられ、中心にあった別府城跡地（旧加世田小学校）が切り開かれ平地となり、加世田の歴史が一見ただけでは判りにくくなってしまっている。知覧の庭園を主とした武家屋敷群とは異なり、明治時代以降の加世田の繁栄を示す建築群が残されており、規模の大きな民家、近代和風の住宅、そして下見板貼りの洋風医院建築まで、築50年以上経た多様である。

鹿児島街の街並みといえば江戸時代以前の知覧や出水の武家屋敷群が有名だが、加世田には明治維新後の文化遺産が多数残されており、これまであまり意識されてこなかった鹿児島の近代史を語り継ぐ景観が佇んでいる。

竹田神社 島津氏中興の英主、島津忠良（日新公）を祭る神社。7月23日の夏祭りでは県指定文化財の「土踊り」「水車からくり」が奉納される。また、イヌマキの並木「いにしへの道」には、47首のいろは歌の歌碑が点在

旧鯉坂医院 昭和5年ころの様式建築で、棟梁は尾辻栄熊 登録有形文化財 現ポツリ（下左）
くるす屋 旧鯉坂医院の入院病棟の部材を使って建てられたギャラリー・喫茶休業中（下右）



① **Omt 邸** 明治期以前の建築で昔は茅葺きだったとも言われる。イヌマキの銘木がある（下左）
旧鯉坂家住宅 登録有形文化財 明治期に近隣の本家から分家し旧川崎邸の敷地に建てられた（明治30年代頃）。橋口五葉(1881-1921)のふすま絵があり鹿児島市美術館に寄託されている（下右）



② **Omn 邸** 築350年とも言われる。もとは茅葺きだった。最近改修され武家門も更新（下左右）
志耕庵 加世田鍛冶の伝統を守る作業場として2001年に建てられた



③ **Ma 邸** 築200年程度の江戸の武家屋敷。鹿児島大学が1980年頃に調査した。一部曳屋し増築されているが、濡れ縁があり玄関まわり（下左）
ibu 邸 築約100年前後の建築を改修（下右）



④ **Iks 邸** 築150年以上の建築。用水路を渡り武家門をくぐるとL字型に屈曲するアプローチで、そこに盆山が置かれている。平庭式枯山水庭園（下左）
旧鯉坂邸 築150年以上の建築で地元に寄贈された（下右）



上鴻巣公民館 小学校の教室を移築した建築（下左）
Kaw 邸 もとは茅葺きの屋敷 倉と武家門がある 旧大山邸で築140～150年の明治期の建築と言われる。鹿児島大学が1980年頃に調査（下右）



加世田麓の景観マップ

加世田には、1768年に造られた益山用水路（幅2m）が竹田神社から約5Km、現在も上鴻巣（かみくるす）下鴻巣、本町手前まで流れ、石擁壁や石橋が点在している。また、犬追馬場や屋地、向江にも、石垣とイヌマキの美しい街並みがある。100年以上前の民家も数多く残っており、江戸、明治、大正、昭和の築50年以上の建築が100棟前後現存している。

加世田の歴史

薩摩平氏の流れを引く川辺一族の別府五郎忠明が、荘園の役人として加世田に入り、忠明が治承年間（1177-79）に今の市街地南部の台地上に別府城を築城。その後9代230年間にわたって、この別府氏が加世田を治めた。室町時代の1420年、別府氏に代わり島津氏が加世田に入る。その後戦国時代になり、島津一族内の勢力争いの結果、忠良が天文8（1539）年に別府城を攻め落とした。この島津忠良は、鹿児島で日新公（じっしんこう）として親しまれている。日新公のいろは歌は、人間として社会に生きる道・人の上に立つ者の心得を説いたもので400余年以来、師弟教育の教典となった。江戸時代に加世田市から大浦町・笠沙町・坊津町・川辺町までの地域が薩摩藩の一つの行政単位「外城（とじょう）」となり、その後江戸時代の中ごろ外城は郷と改められ、坊津・川辺を除く地域が加世田郷となった（1784年）。この郷の中心になったのが、今の市街地南部にあたる麓集落（ふもと）で、地頭仮屋（じとうかりや）と呼ばれる薩摩藩の出先機関があり、郷士の家々がつづく街となった。加世田には別府城と上ノ城等の城があった。一方市の西部にあたる大崎や小松原では、海をとおした商業が盛んになっていった。1914年（大正3年）南薩鉄道が開業し、加世田は近代も発展を続けた。



⑦ **鯉島家住宅** 登録有形文化財 明治期の建築で上飯屋、二階建ての長屋門がある規模の大きな民家。台所も現存している。湧き水がなくなり枯山水となっているが美しい庭園がある。（下右左）



⑧ **Sak 邸** 明治期の建築で下飯屋。規模の大きな民家で、アプローチがスロープとなっていて威風堂々とした門構え。表に築山のある前庭、裏に池泉鑑賞式庭園がある（下左）
鯉島博家住宅 登録有形文化財 明治初期の建築で旧態をよく留めている貴重な民家。造りがしっかりしており、台所の梁はすばらしい。イヌマキの古木と大きなキンモクセイがある（下右）



⑨ **Mik 邸** 江戸末期の住宅で片浦から船で運ばれ移築されていたが道路拡幅のため曳屋されて建っていた。母屋は建て替えられたが倉は現存。鹿児島大学が1980年頃に調査（下左）
Kuy 邸 洋風建築と一体となった2階建ての近代和風建築（下右）



⑩ **旧Ho 邸** 武家門が残る民家で山側の路地に面している（下左）
lbm 邸 1800年頃の武家屋敷。鹿児島大学が1980年頃に調査（下右）



⑪ **Osk 邸** 1850年頃の建築か。鹿児島大学が1980年頃に調査（下左）
Kan 邸 病院だった洋式建築と奥に和風の屋敷がある（下右）



⑫ **Omm 邸** 明治20年頃の建築。鹿児島大学が1980年頃に調査（下左）
lck 邸 加世田幼稚園の前にあった住宅を移築した言われている。江戸時代の武家屋敷で鹿児島大学が1980年頃に調査（下右）



注) 鹿児島大学工学部研究報告第35号 土田充義・揚村固 「日薩摩藩における加世田麓・垂水麓・清水麓・国分麓・数根麓の武家住宅に関する研究」1993.9.30